

【2015/8/27 経済学部ワークショップの様相】

《ワークショップ ReD》

## 「戦争とその後」のドキュメンタリを考える

コメンター

青柳周一 附属史料館教授

阿部安成 教授



ReDの第5回ワークショップは、前々回で土江真樹子さんがとりあげたテレビ・ドキュメンタリ「村と戦争」（戦後五十周年ドキュメンタリー、東海テレビ、1995年3月11日放送、午前10時～午前11時25分、85分）の全編視聴とそれをめぐるディスカッションを内容とした。カメラは岐阜県東白川村に暮らす人びとの、いくつかの、それぞれの戦後を映す。ここにいう戦後は、おおまかに20世紀前期の戦争のその後、とっておこう。

焼夷弾による村の直接の戦禍はごくわずか、軍人として徴集されたひと（「村の若者は根こそぎ」）は909名、そのうちの203名が戦死したという。

このドキュメンタリはなにをあらわし、記録したのか——わたしにはそれはタイトルにいう「村と戦争」というよりも、村の戦後、なのだとおもった。これは映像ドキュメンタリにみあった記録なのだとおもう。映像には戦争をその同時期に撮った映像もあったが、ほとんどは戦争のそのあとのようすを写しているのだから。

では、このドキュメンタリがとらえた「事実」はなにか——わたしの気にとまったそのうちの1つが、真珠湾攻撃において戦果をあげ軍神となったその転換だった。日本軍の戦果は、米国にとっての戦禍となる。だがこれが実際には不発弾だったというのだ。日本国とその村における軍神という顕彰と慰霊は、米国真珠湾では奇襲者として、しかも未遂という記録になっている。

こうしてドキュメンタリは、戦後における戦争の評価が複数に分かれてしまうことを映しだしている。旧満洲での開拓者は侵略者に、引き揚げてきた村での「アカ」呼ばわり、戦没者を追悼する村の「戦記」と呼ばれる追悼冊子への異議申し立てが姿のみえない村人から匿名の郵便で非難されてしまう。こうした戦後の村における戦争の評価が、村のなかに諍いを生じさせる。



だが、1994年に企画された「戦時史料館」設立は着々と進み、いつのまにか「平和祈念館」と名を変えて、蔵を改造した村の展示館が開館する。そこには戦没者の遺品が集められ、戦没者すべての遺影が掲げられたという。その姿はほとんど軍服を着た軍人となっている。それは慰霊と追悼であるとともに、戦争行為の顕彰は死の賛美へとつながる怖れを、わたしは感じた。

テレビ・ドキュメンタリとしては数が少ない90分ちかい映像は、いくつもの、それぞれの戦後をみせる。それをどう考えるかは、視聴者にゆだねられている。

なお、東海テレビは戦後70年となる今年2015年に過去に放送されたドキュメンタリ6編を再放送した(8月8日～8月15日)。そのうちの2編が「村と戦争」「むかしむかしこの島で」だった。(阿部安成)